



いや谷山の仙人

昔、昔のその昔、おおみ（大見）という所に三つの山がありました。波のないきれいな三野津の入り江の海が三つ並んだ山を映しています。入り江は三つの山に「おはようございませう。今日も良いお天気でありますように」と挨拶しました。まだまだ夜明けには早い早起きです。

その中の一番高い山が一番口に言いました。「今日は、三つの山の中で一番偉い山は誰か決めようと思う。入り江の海さんは毎日俺たちを映しているからよくわかるだろう。三人の中ではもちろん僕だと思わないかい。なぜって。それは決まっているだろう。一番高くでどっしりし、毎朝お日様をお空の上へ持ち上げているんだもんなあ」と日上山ひあげやまが自慢そうに言いました。そして、まだ続けて言うのです。「俺の山には龍王さんを祭っているだろう。だから、一声呼ぶと、雲が出てきて雨も降らし、お日様を隠してしまうんだ。どうだい！」と自慢いっぱいに大声で言いました。

朝のお日様が出かかると、お空が真っ赤に染まって見事な姿で入り江に映りました。

「おお、ワンダフル、日上山さん！」と海が言いました。こんどは北隣のかわいい、貴峯山とみねやまが言いました。「日上山さんは男らしくて力もちでいいなあ。でも私はポーズがいいでしょう。形は富士山そっくりだし、てっぺんから裾野はすばらしいロングスカートをはいて広げたようなね。スマートでしょう」と、格好良くポーズをとるのでした。

朝の真っ赤な空の色が貴峯山に映えてちやうど赤富士のように染まりました。

「おお、ビューティフル。なんと美しいんだらう！」と入り江の海がまたほめました。

朝の太陽が日上山から顔を出しました。二つの山はパッと輝き、三野津の入り江は美しい朝です。貴峯山はスカートをはさらに広げて満足そうです。



とみねやま  
貴峯山



ひあげやま  
日上山

まん中て黙って聞いていた彌谷山が、ぼそぼそ小声で言いました。

「二人ともいいなあ。日上山さんは高くて力持ち。貴峯山さんは器量がよくてポーズが上手、僕は何にも自慢できるものがない。背は天霧山さんによりかかっておんぶしているみたいだし、膚はだはあれてあばたづらだし、良いとこないや」と泣き顔をして言いました。

そこへ、どこからともなく杖をついた白髪の仙人が現れました。

「何で泣きべそをかいているんだ。わしはお前さんのあばたの岩屋に住んでいる剣けん五山ごさん御ご霊りょうというものじゃ。雨や霧の雫しずくを吸うて生きている。いや谷山の本当の力を見せてやるから、よく見るのだ！」と言ったかと思うと、岩屋の奥の方に向かって何やら呪文をとこなえ出しました。

すると、ポチリ、ポチリと落ちていた水滴がだんだんと多くなり、ザアザアと川となつて流れ出しました。ひやこい水が谷いっぱい霧を張りながらどんどん流れていくではありませんか。みんな目を見張って、びっくりしてしまいました。しばらくすると仙人は杖を振り上げ「止まれ、水！」と声かけました。水はハタと止まりました。そしてきびしい顔で言いました。「山のねうちは、高いこと結構。美しい姿も結構。も一つ大事なことは綺麗な水を流すことだ。綺麗な水を海までも流すことじゃー！」と、そこまで言うと、スーッと岩屋の中に消えていってしまいました。太陽はにこにこ輝いています。

いや谷山の不思議な仙人の力を見せられた二つの山はだまつて息をのみました。

その後、日上山は龍王川を作り、貴峯山はぜんじょう川を作り、いや谷川は二つの川を集めて一緒に仲良く砂を運んで、田んぼや畑を作り、所々に出水でみずの井水いみずを流し出して、豊かなおおみ野を作ったのです。

※日上山は火上山と書くのが一般的ですが、ここではお日様にとどくぐらい高い山を現すために、あえて「日」という字を用いました。

※貴峯山は「ごみねやま」と呼ばれていますが、昔「ごぶれやま」と呼んでいた人もありました。

